

機動戦士ガンダム Marine of Lamentations

ロゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一年戦争が終結し、仮初めの平和を歩み始めた宇宙世紀0080。シーマ・ガラハウ率いるシーマ艦隊は如何にして0083までの三年間を生き抜いたのか。そして一年戦争時、学徒兵の動員に多大なる貢献を果たしたという「広告塔の少女」とは？

これは哀しき海兵たちの物語である。

Marine of Lamentations Ⅱ 海兵隊の

哀歌

目次

第1話 「ブルーアイランド」	1
第2話 「管制室」	5

第1話 「ブルーアイランド」

漆黒の空間に浮かぶ、巨大な円筒状の建造物。

無数に設けられた衝突防止灯が明滅し、広大な宇宙のほんの一部に彩りを添えている。

ここは、一年戦争の開戦と同時に建造が中断されてしまったコロニー「ブルーアイランド」だ。

UC0080現在、連邦軍の管理下に置かれたこのコロニーは、幸運にも戦禍には巻き込まれることなく、その不完全ながらも圧倒的な体軀を不気味に漂わせていた。

コロニーの一角に断続的な閃光が走る。

その瞬きが人型の兵器、モビルスーツに着弾し、やがて大きな火球に変わった。

閃光を放った主は、紫色をメインカラーとしたMS-14Fスゲルググ・マリーネ。

下腕部に内蔵した110mm速射砲の砲身が赤熱化している。速射砲の餌食となったのはRGM-79ジムだ。

白と赤のオーソドックスな連邦軍制式カラーの機体が、推進剤の誘爆により完全に大破している。

ジムを撃破したゲルググ・マリーネのパイロット、シーマ・ガラハウが手馴れた動きでコントロールスティックを操作すると、ゲルググのマニピュレーターが即座に反応して飛来してきたジムの残骸を払い除ける。

「クルーガ、聞こえるか？ そっちはどうだい！」

同時にコンソールのディスプレイに表示されている通信モードをアクティブにして、冷たくも断固たる意思を感じさせる声で僚機の部下へ問いかけた。

「シーマ様！ どうやら奇襲に成功したようですぞ。ジムを二機と哨戒艇を沈めた！」

区画違いのエリアに侵攻していたクルーガと呼ばれた男から、軽いノイズを伴った音声通信が返ってきた。

その低い声は喜びを隠せないのか、不釣り合いなほど弾んでいる。「そうかい、よくやった。まだネズミは潜んでるはずだ。警戒は怠るなよ！」

シーマは、彼女にしては珍しく労いの言葉をかけると、コンソールの端末を操作して機体の光学観測装置を作動させる。

短い起動音が鳴り、メインモニターの下部にスクリーンが表示され、周辺宙域の走査結果を映し始めた。

そして満足そうな笑みを浮かべると、メインモニターに大きく映るコロニーの外壁に動きがないか注意を払いながら、小さく呟いた。

「あたしは生き残るんだ。なんだってやってやるよ……」

* * *

数日前にさかのぼる。

コロニー「ブルーアイランド」で連邦軍とジオン残党が裏取引を行う。

しかも公になっていない機密情報が絡んでいる危険な取引だ。

金で飼っている連邦軍の内通者からその情報を得てから、一時間が経過していた。

一年戦争が終結し半年が経過しても、連邦政府は宇宙も地球も完全に掌握しているとはとても言えず、ジオンの残党による局地的な抵抗活動は増加の一途を辿っている現在。

それどころか、連邦軍内部においても不穏な動きをする部隊が現れ始めている。

そんな状況の中で裏取引が両者の間で行われたとしても、何ら不思議ではない。

シーマ艦隊を率いるシーマ・ガラハウは、旗艦リリー・マルレーンに設けられた自身の執務室で考えを巡らせていた。

「シーマ様、ブルーアイランドまでの所要日数が出ました」

同室で端末を操作していた秘書官、セラア・パールストーンが柔らかな声で報告を始めた。

「メインノズル修理中の二番艦に合わせて航行したとしまして、最短

で五日です。二番艦を考えなければ二日で到着します」

緩やかに巻いた背中まで届く白銀色の髪が特徴的な、まだ二十代半ばであろうセラアは報告を終えると、開いていた端末を静かに閉じた。

そして背後の壁際まで歩みを進め、上品な装飾が施されている棚の前に立ち、シーマの言葉を待つ。

主に対して極めて忠実な秘書官である彼女の、いつもの定位置だ。

「下がりな」

再びの静寂が執務室を支配してから数分は経っただろうか。

短く簡潔なシーマの指示にセラアは深々と一礼し、退室していった。

セラアが退室してからもシーマは思案を続けていた。

ブルーアイランドまで最短で五日。

仮に最短で到着したとしても、コロニーに常駐しているであろう連邦軍の駐留部隊の排除には時間が足りない。

連邦軍は先に排除しておかなければならないのだ。

それでは、二番艦を置いて残りの艦隊で先行する案はどうか。

駐留部隊は中隊規模との情報を得ているので、排除に支障はないだろう。

しかし、この案でもひとつ大きな問題が生じる。

二番艦を除く艦隊戦力で、戦力が未知数なジオンの残党部隊と交戦することになるのだ。

「シーマ様！」

象牙作りの豪華な机に備え付けられた通信機のディスプレイが点滅し、音声通話モードの起動を報せると同時に、男の声がシーマの名を呼んだ。

「ロイズか。なんだい？」

「ブルーアイランドに向かってる残党部隊の詳細が分かりました！」

「こいつはお宝の山だ！」

猛者揃いのシーマ艦隊で副官を務めている、ロイズ・ギルレットだ。その声のトーンから興奮している様子が伺える。

「なんと、あの第404補給大隊の残存戦力で構成された部隊でさあ！武器も資材もたんまり残ったまま雲隠れしやがったって噂の！」
「ほう？ 第404補給大隊の残党かい。そいつは確かに宝の山だねえ」

シーマの双眸が妖しく細まり、好奇に満ちた輝きを湛える。

そして本能が脳裏で呟いている。

こいつはリスクを冒す価値のある獲物だ、と。

部隊規模については不明だが、名のある将校やエースパイロットが率いていないのだけは確かだ。

二番艦を欠いたとしても叩けない相手ではない。

「いいかいロイズ。今度の獲物はちよつとばかり大きいんだ。足の遅い二番艦は置いていかなきゃなんないし、連邦と違って手の内を知られているから上手く立ち回らなきゃこつちがやられちまう。分かっているんだろうね？」

「構いません。オレたちはシーマ艦隊だ。獲物がなんだろうと喉元に食らいついてやりますよ！」

シーマはロイズの言葉に満足げな笑みを浮かべた。

そして片手に持っていた艶やかな扇子を、もう片方の掌に打ち付ける。
「る。」

連邦もジオンも関係ない。

生き残るために手段は選ばない。

連邦はあたしに銃を向け、ジオンはあたしの故郷を奪った。

今度はあたしが奪う番だ！

「全艦に通達！ 狩りの準備に取り掛かりな！」

第2話 「管制室」

先刻まではデブリの影も無かった宙域が、大小様々なモビルスーツの残骸で覆い尽くされようとしていた。

海兵隊仕様のゲルググ数機が残骸を避けながら飛行し、赤く光るモノアイを忙しなく左右に動かしては周囲を警戒している。

コロニー「ブルーアイランド」は、今やシーマ艦隊の制圧下にあった。

「それで？ 連邦軍のあんたがジオンと何を取り引きしようってんだい？ あたしもジオンなんだ。勿体ぶらず教えてくれよ」

ブルーアイランドの外壁に仮設された管制室に、シーマの嘲笑が響き渡る。

それに追従するように、銃器を携えた部下たちが笑い声を上げた。管制室は凄惨な光景と化していた。

連邦軍のノーマルスーツ姿の兵士たち数体が物言わぬ軀となつて部屋中を漂い、霧散した硝煙が空間を僅かに白く濁らせている。

部屋には大型のコンソールを中心に多数のモニターが設置されていて、本来は管制官が座るであろうシートには連邦軍の士官が座らされていた。

「・・・なぜだ？ 同じジオンであると言うならば、なぜこのようなことを」

口元に血を滲ませて疲弊した様子の士官は、海兵たちに銃口を向けられながらも、毅然とした口調で問いかけた。

シーマはその言葉に目を細めると、手にしていた扇子をパチンと鳴らして閉じた。

「一口にジオンと言っても、全員が同じ思想や理想を掲げているわけじゃないのさ。それはお前たち連邦も同じだろ？」

「海賊風情と一緒にしないでほしい・・・！」

「はっ！ 連邦本体に隠れて裏でこそこそと取り引きしようとする小物が、大きな口を叩くじゃないか！」

感情的な士官の言葉にもシーマは余裕の表情を浮かべながら、扇子

を士官へ突きつけるように振って言葉を返す。

その動きに合わせるように、腰まで伸びている暗緑色の長い髪が妖しく宙を踊った。

「それで？ あたしの質問に答えるのかい？ それとも・・・」

扇子をゆつくりと動かし、自らの側頭部へその先端を突きつける。

柔らかな表情を浮かべてはいるが、妖しい光を湛えた瞳は冷酷な本性をさらけ出していた。

「・・・分かった。話すから、殺さないでくれ」

士官の男は少しの間、考えを巡らせていた様子だったが、やがて観念したのか力なくうなだれると、振り絞るように口を開いた。

「捕虜を引き渡す予定だった。一年戦争において我々が捕虜とした、ジオンの要人だ」

管制室の内壁に沿って備えられている透明なスクリーンの向こう側で、海兵隊のゲルググが青白い噴射口をバーニアから放ちながら飛行しているのが見える。

シーマはゲルググの動きから、支配下に置いている宙域に異変が起きていないことを確認すると、士官に改めて向き直った。

そしてその答えに眉をひそめながら問いかける。

「ジオンの要人だと？」

「そうだ。名は、リアン・ローディアル。知っているだろうか？」

両手を拘束されている士官が口元の血を軍服の襟で無造作に拭き取る。

その名を聞き、驚いた声を上げて顔を見合わせている屈強な部下たちに、シーマは無言の鋭い視線を巡らせて黙らせると、小さく頷いて続きを促す。

「彼女の家柄は知っての通り、ジオンの貴族だ。それに戦争中は英雄として祭り上げられていたと聞いている。その理由からか知らないが、政治的判断があって捕虜として拘束した事実を公表しなかった。だが、裏で接触した本来の取り引き相手だった連中が法外な身代金を提示してきて、な」

邪魔さえ入らなければ莫大な金を得ていた、と言わんばかりに苦渋

の表情を見せてから、士官は再びうなだれた。

1Gに満たない程度だが重力のある管制室に暫しの沈黙が訪れる。暴力で支配した士官の言葉に虚言が含まれていないと判断したシーマの顔に、彼女には珍しく驚きの色が浮かんでいた。

リアン・ローディアル。

もちろん知っている。

知っているどころか、有名人だ。

先の戦争において、劣勢を跳ね返そうと国民総動員令と称して哀れな若者たちを学徒兵として徴兵し続けた軍。

その若者たちにとって、リアンは絶対的な正義として君臨していた。

死を司る天使。

いつからかそう渾名されるようになった彼女の戦績が、何よりもその理由を雄弁に物語っている。

教導団に所属していながら前線の部隊に配属されたりリアンが沈めた戦艦やモビルスーツの数は、いわゆるエースパイロットの記録と比肩していた。

ただし公式の記録ではない。

所属が教導団であったため、戦闘上の記録は非公式の扱いとされていた。

それでも軍の広報はリアンの活躍を大々的に報じた。

彼女が連邦の戦艦やモビルスーツを撃墜するたびに、国民の、特に同年代の若者たちの士気が熱を帯びるかの如く上がったのだ。

そして彼女に続けとばかりに、若き兵士たちは自ら志願して最前線へと赴く。

戦地においては強者こそが正義。

軍はリアンを、十五歳の少女を、徴兵に極めて有用な広告塔として祭り上げたのだった。

そしてその消息は、決戦の地、ア・バオア・クーにおいて絶たれている。

「リアン・ローディアルはジオンでは戦死扱いとなっている。大破し

た機体が見つかったからねえ。それでいまどこにいるんだい？」

シーマは内心の驚きを悟られまいとすぐに平静を装いながら、士官の眼前に自らの冷たくも整った顔をゆつくりと近づける。

「隣の区画に作業棟がある。その二階に来賓用の部屋があり、扉をロックして抑留している」

甘いバニラの香水と硝煙とが混じった、およそこの管制室には似つかわしくない倒錯的な香りが士官の意識を否応なく刺激する。

意識を混濁させて自白作用を生み出す特殊な薬液の存在を、男は知らなかった。

パイロットスーツに包まれた銀色の指先が優しく士官の頬を撫でるように動き、続いて自らの判断力の低下に困惑して動けない男の両目をそつと覆う。

次の瞬間、パシユツ、と空気を圧縮して炸裂させたかのような音が士官の脇腹のあたりから聞こえた。

「情報料さ。冥土の土産にしておくれよ」

反対側の手に握られていた鈍色の拳銃を腰のホルスターに収納しながら、シーマが艶やかな声色を使つて耳元で囁く。

士官は薄れ行く意識のなかで女の甘い吐息を感じながら、怒りや恐怖といった感情を忘れたまま命の灯火を消していった。

「分不相応なことさえしななければ、長生きできたかもしれないのねえ……」

小さく呟いたシーマの言葉からは、微かに哀れみが漏れているようだった。

そして光を失いながらも見開いている青い瞳から避けるように、そつと銀色の指を下ろしてその瞳を閉じる。

これは哀れみからじゃない。

情報料にサービスしてやったんだ。

「さあ、英雄のお嬢ちゃんを迎えに行くよ。外のゲルググにしつかり警戒させな！」

部下に向き直ったシーマの顔に、いつもの冷酷な色が戻っていた。捕虜とした男を躊躇することなく殺した彼女の姿にわずかに畏怖

した様子だった屈強な部下たちが、弾かれたようにそれぞれの責務を果たすべく動き始める。

やがて管制室から命ある者たちが去っていくと、まるで赤い河の如く、赤黒い血がその空間を静かに覆い始めた。